
江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

Nakazawakatsuyoshi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

【Nコード】

N4675BA

【作者名】

Nakazawa katsuyoshi

【あらすじ】

これから江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたりを書いて行こうと思います。初めての小説なので緊張します。これからよろしくお願いします。

三年生の始業式

あれから2年たった。相変わらず毛利家では「眠りの小五郎」の評判を聞きつけ依頼人が殺到している。その都度コナンは小五郎を眠らせていた。そうしてコナンも明日から三年生。最近心配している事がある。自分の顔が工藤新一になって来ているのだ。蘭も最近不思議そうな目で見てくるし大変だ。

次の日、始業式の朝からの校長先生の話が長くてとても疲れた。少年探偵団は奇跡的にクラスを分けられなかった。

歩美「よかったー。またコナン君と同じで。」

光彦「えー。なんでコナン君んですかー。僕の方が絶対にうっ！」

光彦は元太に押された。

元太「なんでコナンなんだよー。」

光彦「元太君何すんですかー」

光彦は元太に押し返すと二人は喧嘩を始めた。コナンはその様子を見て呆れていた。

灰原「どう？高校生探偵さん　女に好かれ、他の男がやきもち焼いているを見て？」

コナン「へっ？なんのことだ？」

灰原「あなたって本当に鈍感なのね。」

コナン「だからなんのことだよ。」

灰原「別にー。」

コナン「チェ、なんだよ、教えてくれたっていいのによ。」

灰原「よろしくね。」

コナン「は？」

灰原「だってクラスまた同じじゃない。」

コナン「ああ」

灰原「また疲れそうね。工藤君私達に事件を巻き込まないでね。」

コナン「わりかったなー。」

歩美「ちよつとコナン君、哀ちゃん、二人だけでコソコソしゃべらないの。」

光彦「そうですよー。私達は五人で少年探偵団なんですから。」

やがて三人とわかれ、灰原とコナンの二人でかえっていた。

灰原「まったく疲れるわー。校長先生の話」

コナン「確かにあれはなげーよな。」

すると、いきなり灰原の顔が暗くなった。

灰原「まあ、もう少しでこの生活から抜け出せるだろうけど。」

コナン「ん？それどういう意味だ？」

灰原「解毒剤が完成したのよ。」

コナン「ほっ本当か？」

灰原「工藤君！喜んではいられないわよ。まさか組織のこと忘れてないでしょうね。」

コナン「ああ、わかってるよ。」

よっしゃー！コナンは心の中で思っていた。

灰原とコナンの心情

その日、彼とわかれた後灰原はパソコンで解毒剤の資料の整理をしていた。

（もし、工藤君と私が元の姿に戻ったらどうなるのかしら？吉田さん達は私をどう思うかしら？蘭さんは私をどう思うかしら？そして彼は…？）

「よっ灰原！」

灰原「えっ？」

コナン「俺だよ」

灰原「あなたいつからここに？」

コナン「さっきからずっといたぜ。気づかなかったのか？」

灰原「ええ。考え事してて。ってあなた何人の部屋勝手に入ってるのよ。」

コナン「お前はさ、一人で考えすぎなんだよ。たまには俺とかに相談してくれたっていいんだぜ。」

灰原「いいのよ。これは自分のことだから。」

コナン「お前かわいくねえなー。」

灰原「かわいくなくっていいのよ。」

コナン「まっそこがかわいいんだけどな。」

灰原「えっ？」

コナン「いついや、なんでもねえよ。」

灰原「あらそう。」

灰原の顔がまた少し暗くなった。それに勘付いたコナンが「お前さ、動物好きだよな。」

灰原「ええ。」

コナン「今度さ、いつしよに動物園行こうぜ。」

灰原「無理よ。私土日あいてないし。」

コナン「平日でいいじゃないか。俺ら学校いなくても内容わかる

だろ？たまにはいいだろ？」

灰原「それもそうね、付き合ってあげようかしら。」

コナン「本当にかわいくねえな！。」

言ってから、しまった、と思ったが灰原が明るくなってホッとした。
(なんで俺がこいつの事ここまで気にしてるんだよ。)

自分でもわからなかった。

コナンが帰ったあと灰原はとても機嫌がよかった。博士は何があったのだらうと首をかしげていた。

帰宅途中コナンはさっきの気持ちについて考えていた。

(どうしたんだらうな、俺)

そう思っていると、背後から気配を感じた。危険を感じ逃げたが相手の足は速く捕まっていまい、そのまま気絶してしまった。

背後の謎の人

目が覚めるとここはどうやら自分の本当の家らしい。そして目の前には有希子がいた。

コナン「母さん！」

有希子「あら新ちゃんおきたの。久しぶりね。」

コナン「驚いたじゃねーか。やめろよな。こういうの。」

有希子「久しぶりに会う母親に対しての挨拶にしてはそっけないじゃない。それにしても慣れてるでしょ、こういうの。」

コナン「だからって、睡眠薬でねむらせることないだろ。」

有希子「新ちゃんだって蘭ちゃんのお父さんを眠らせてるじゃない。」

「

コナンは返す言葉がなかった。

（こいつにはかなわない）

そう思った。

そのとき

有希子「新しい恋人さん見つけたそうじゃない。」

コナン「違う違う、いくら動物園にいつしよに行くからって灰原と恋人なんかじゃ…。」

有希子「あら？私哀ちゃんなんてひと言も言ってないけど？」

コナン「しまった？」

有希子「そうなの動物園に？お金必要じゃない？」

コナン「いいよ。おっちゃんにもらうから。」

有希子「それじゃ悪いわよこれ持っていきなさい。」

有希子は封筒を渡した中には百万円入っていた。

コナン「こんなにいらねーよ。」

有希子「いいのよ。使わなくても持つといて。あと…これも持つといて。」

とコナンは巨大なダイヤモンドのネックレスを受け取った。

有希子「それはね私が優作に告白されたときにもらったネックレスよ。もし理想の相手が見つかったらその人にあげて。」

コナン「いいのか？んな大事なものを。」

有希子「いいのよ。じゃ哀ちゃんと頑張って！」

コナン「だから違うって。」

そう言っても有希子は笑っているだけだった。

寝る前、有希子は飛行機のため帰った。

（俺って灰原が好きなのか？）

（……んなわけねーか。）

明日は早いので早く寝よう。カチッ

動物園

次の日、灰原とコナンは動物園に行くことになった。場所はトロピカルランド 遊園地だが動物園もあるということでした。もちろん蘭と来たことがあることは灰原には言わない。ていうか言いたくない。

コナン「相変わらず混んでるなここ。」

灰原「ええ。」

それから二人はキリンや象、猿やライオンを見た。それから遊園地側のジェットコースターや観覧車、それから一番驚いたのはお化け屋敷だ。灰原はものすごく怖がりで抱きつかれてしまった。

コナン「灰原って幽霊を信じないって言ってた割に怖がりなんだな。」

相変わらず灰原はふるえている。コナンがあきれていると。見慣れたひとがこっちに来る！

（蘭だ！）

コナン「やばいぞ！メガネ持ってたね！」

蘭「あれ？どこかで見たような？あっ！しつ新一！」

コナン「ちっ違っよ蘭姉ちゃん。僕だよ。」

蘭「ああ、コナン君か、あら？哀ちゃんも、もしかしてデート？」

コナンも灰原も赤くなった。

コナン「ちっ違っつてば。」

蘭「頑張っつてねコナン君！じゃあね！」

こうしたハプニングもあったが無事に博士の家に着いた。

コナン「楽しかったな」

灰原「そうね。」

灰原「私解毒剤のデータ整理してくるからゆっくりしてって。」
コナン「おーサンキュー」

自分の部屋に戻るとパソコンを立ち上げて解毒剤のデータをまとめていた。すると、パソコンに信じ難いことが書いてあった。

コナンがテレビを見ていると暗い顔した灰原が来た。

灰原「今日は疲れたわ。悪いけど帰ってくれる？夜遅いし、蘭さん心配しているでしょうし。」

コナン「そうだな。今日はありがとう、また明日な。」

灰原「ええ。」

毛利の家でコナンは考えていた。灰原のあの顔はなんだろう。俺はなんかしたか？

灰原の手紙

次の日、学校で灰原は無言になってしまった。帰りに話していると
きも何もしゃべらない。

歩美「哀ちゃんどうしたのかな？」

光彦「何もしゃべらないですねー。」

元太「うな重くえば大丈夫たぜ。」

光彦「それは元太君だけですよ。」

元太「なんだとー。」

歩美「まあまあ。」

コナン（確かになんで落ち込んでいるんだ？灰原。）

不具合を調整するため預けていたメガネを受け取る為博士の家にコ
ナンは行くことになっている。

コナン（灰原がどうして落ち込んでいるか、博士に聞くか。）

コナン「博士入るぞ」

博士「おお新一か、さっき出かけた哀君から手紙をあずかっている
よ。」

コナン「なに？」

コナンは手紙を読んだ。

「昨日はどうもありがとう、とても楽しかったわ。私が落ち込んで
いる理由は動物園のことじゃないの。心配かけてごめんなさい、昨
日パソコンで解毒剤の資料の整理をしていたら重大なことに気が付
いてしまったの、確かにこの解毒剤で計算上私達元の姿に戻る、
でも身体が縮んだときに急激に死んだ細胞を急激に元にもどすと身

体が持たず死んでしまう、このことを計算にいれてなかった、私のミスだわ、もうあなたと会うこともないでしょう。最後に一つだけ聞いて欲しいことがあるの。私…あなたのことが好きだった、さようなら。あなたを元に戻せなくてごめんなさい。」

コナンは手紙を読みおわり、

コナン「博士！俺のメガネをかしてくれ。」

博士「わかったがどんな内容だったんじゃ？」

コナン「話は後だ、灰原が生きて戻ったらはなしてやる。」

モーターボードに乗りメガネのリーダーで灰原の探偵バッジを見つける。

コナン「学校だな間に合ってくれ。」

コナンの告白

灰原は学校の屋上にいる。

灰原「私ってだめね、私が頼ったせいでお姉ちゃんは死んでしまつて、工藤君を工藤君の身体に戻れなくしてしまつて。ありがたいことは死んだら自分を思ってくれる人がいないこと。周りに迷惑掛けずに死ねるんですもの。組織の倉庫で死ぬよりよっぽどいいわ。欲をいえば最後に工藤君に会いたかつた。」

灰原は屋上のフェンスをこえ飛び降りようとしたとき。

コナン「死んだら自分を思ってくれる人がいないだと？周りに迷惑がかからないだと？ふざけるな。」

灰原「工藤君！」

コナン「そこまで考えているなら、生きろよ。生きて償えよ。おまえの薬で死なせたぶんだけ生きろよ。」

灰原「なんであなたはそう優しいの？何人も殺した私を優しくしてくれるの？」

コナン「それは…お前が好きだからだ。」

灰原「えっ？」

コナン「ほら、お前のことを思っている人はいるぞ。ここに、ほら、いつまでもそんなところにいんなよな。」

灰原はうなずいてこっちに來た。

コナン「ほらこれ、お前にやるよ。俺からの愛の印だ！だから絶対死のうどか考えるな。お前が死んで迷惑掛かる人はたくさんいるんだぜ。」

灰原は渡されたものに驚いた、巨大なダイヤモンドのネックレスだったからだ。

コナン「どうだ？」

灰原「嬉しい！」

そのときの灰原の笑顔はとても美しかった。

灰原「みんなにはここであつたことは秘密にしておいて。」

コナン「わかった」

コナン「博士が待ってる、はやく帰ろうぜ。」

灰原「うん！」

そのときの灰原の涙はダイヤモンドと同じように輝いていた。

歩美の心

光彦「灰原さん明るくなりましたねー。」

元太「うな重食ったんだよな？」

歩美「そんな元太君じゃあるまいし。」

灰原「本当にみんな心配かけてごめんなさい。でも特に何もなかったわよ。ね？江戸川君？」

コナン「え？あつああ。」

歩美の顔が暗くなった。

歩美「そうなんだ…コナン君は哀ちゃんが暗かった理由しってたんだ

…」

コナン「だからなんでもないって、な？灰原。」

灰原「ええ。」

歩美の顔が元に戻った。

歩美「そっか、そうよね、安心した。」

コナン「なにが？」

歩美「ううん、なんでもないの、気にしないで。」

灰原「ところで、今度の日曜日、博士がキャンプする？って言うてるんだけどどう？」

歩美、光彦、元太「いくいく！」

コナン「こないだ土日空いてないっていつてたじゃねーか。」

灰原「嘘よ。学校めんどくさかったから、平日動物園にいくようにしただけよ。」

コナン「お前なー。」

歩美「ふーん、哀ちゃんとコナン君こないだ動物園にいつてたんだ…」

歩美の顔がまた暗くなった。

キャンプにはコナン、灰原、歩美、光彦、元太、蘭、博士と行くこ

とになった。

キャンプ場に着くとテントをはった。みんながテントをはるなかで灰原とコナンは川にいた。

コナン「きれいな川だな。」

灰原「ありがとね。」

コナン「ん？」

灰原「あなたがあの時来てくれなかったら、私いないですものね。」

コナン「誰にだってあるさ、弱気な時つてのは、問題はどうかえていくかな。」

灰原「一人でこえられないなんて私弱いよね。」

コナン「そんなことないぜ、お前が誰より強いってことは知ってるぜ、それに…」

灰原「それに？」

コナン「こえられない時は俺が守ってやるから。」

灰原「ありがとう、工藤君」

（工藤君？誰よそれ？）

気がつくと二人がいないので、二人を探していた歩美が話を隠れて聞いていた。

（やっぱり哀ちゃんが暗い理由、コナン君は知っているんだ…てことは二人は…）

歩美は泣きそうになりながら張り終えたテントに戻った。戻ってきた歩美の異変を感じた光彦は

「どうしたんですか？」

と聞く、しかし歩美は

「ううん、なんでもないの。」

とテントの中で泣いていた。

蘭の疑惑

その日の夜、歩美は蘭に聞いて欲しいことがあると話し合っていた。歩美「歩美は前にコナン君が好きだって言っただけでしょう？そのことでなんだけど。」

蘭「それでコナン君がどうかしたの？」

歩美「あのね、私みんながテント張っている時哀ちゃんとコナン君がいなかったから心配で探しに行ったの。そしたら川の前で二人が話していたの。二人の話を聞いているとなんだか深刻そうな話だから、話かけられなくて、二人ともまるで大人みたいな口調で私入り込む隙がなかった、コナン君は哀ちゃんのことを好きなのかな？」

蘭「どうかな、わからないけど、でもたとえコナン君が哀ちゃんのことを好きでも、まだ小学生なんだから大丈夫よ、これからどうなるかわからないし。」

歩美「違うもん！哀ちゃんがね、コナン君のこと愛称で呼んでたもん。」

蘭「なんて呼んでたの？」

歩美「工藤君って。」

蘭「！？なっなんで。」

歩美「知らないけどそうよんでたもん。」

蘭「大丈夫よ、愛称で呼んでるからって好きだからなんてわからないし、歩美ちゃんもって自信をもって！」

歩美「そうだよ。私頑張ってみる！」

歩美はそうとうと布団のを被った。

歩美「おやすみなさい。」

蘭「おやすみなさい。」

蘭は哀ちゃんの言っている「工藤君」のことを考えていた。

（もしかしてコナン君は新一なのかしら。重要なことで私にそのことを言えない事情があるとしたら？最近顔が新一に似て来てるし…

自信持つてつて言った私がこんなに悩んでどうするのかしら?」

次の朝、蘭はコナンに聞いてみた。

蘭「新一?」

コナン「なんだ? 蘭」

言ってからしまったと思い、慌てて付け加えた、

コナン「なーんちゃって、はははは。」

蘭（怪しいわね。）

灰原が耳元で言った。

灰原「ちよつと工藤君、あんたなにやってるの。ばれちゃいけないのよ。」

コナン「わかってるさ、でも今の蘭、わざとらしくねえか?」

灰原「そうね、勘付かれてるかもね。気をつけなさいよ。」

コナン「わかってるよ。」

その後のキャンプは元太が火遊びして怒られた以外無事に終わった。そしてコナンはあることを決心した。

蘭の疑惑（後書き）

コナンが告白したのに、恋愛描写が無くてすみません。次からぼちぼち入れます。

修学旅行

コナンにとって人生二度目の小学校の修学旅行だ。場所は京都、コナンは事件などで何度も訪れたところなのではつきり言って暇だった。それに対し灰原は三年生の時外国にいて、行っていない、しかも東洋人ということではじめられていたので彼女にとっては初めての友達との修学旅行だった。

コナン「ああーつまんね。」

灰原「あら、そうかしら、私は結構楽しみだけど。」

コナン「まあ、お前と部屋同じだからな。」

三年生だと性的意識がないのでお風呂以外は全て男女合同だった。

灰原「工藤君、変なことしないでよ。」

コナン「バーロー、誰が三年生の体見て喜ぶかってんだ、ロリコンじゃあるまいし。」

灰原「その三年生のことが好きなの誰だっけ？」

コナン「なっなんだよ。」

灰原「冗談よ、冗談。」

灰原「工藤君？」

コナン「あん？」

灰原「私決めたの、このままの体で暮らして行こうって。」

コナン「でもパスポートとかどうすんだよ、海外にいけないぜ。」

灰原「そんなことしなくても暮らしていけるわよ。この体の方が組織にばれにくいし。」

コナン「そうか…」

灰原「しっ心配しないであなたの解毒剤は作るから。」

しかし、内心不安だった。あの解毒剤の失敗からあまり自信がなくなってきた。もしかしたら作る気がないのかもしれない。

（なぜ？）

灰原「そんなの知らないわよ。」

コナン「えっ？何が？」

灰原「へっ？ああなんでもないわよ。」

コナン「そうか…」

コナンは今はつきり見た灰原の顔が曇ったのを

（またなんか考えてるな）

だか何を考えているかわからなかった。コナンはそういうところは鈍感なのだ。

京都の街並は昔の街だかなんと緑色のマクドナルドの看板があった。灰原「街並みの景観のため緑色にしたって聞いてたけど本当なのねこの色の方が景観を乱すように見えるけど。」

コナン「まあ、世の中単純にしか物事を考えられない奴もいるんだな。色をあわせらいいつてもんじゃないぜまったく。」

仲良くいっしょに並んで歩いている二人の様子を見て歩美は複雑な気持ちだった。

そしてホテルに着くと班ごとにわかれて部屋に入った。部屋の人はコナン、灰原、歩美、マリアの四人である。余った六人部屋を四人で使うのだから広かった。コナンは一人だけ男子なのが不服そうだったが。

それからあつという間に時間が過ぎ夜中の12時になっていた。灰原は夜中はパソコンで調べ物をしているので寝つきが悪かった。ベランダで景色を眺めていた。京都の夜風は寒いが心地よかった。

コナン「どうした？灰原。」

灰原が布団の中にいないから気になって来たのだ。

灰原「ちよつと眠れないだけ。」

コナン「お前いつも解毒剤作るのにパソコンばっかやってるからな。」

（あれ？ベランダが開いてる。）

見回りの先生が様子を見にきた。そこに灰原とコナンがいた。

真夜中の出来事 疑惑はより現実

灰原「ちがうわよ。」

コナン「おい、灰原。」

灰原「何かしら？」

コナン「俺もこの身体で生きていくことにする。」

灰原「えっ？今なんて？」

コナン「俺これからこの体で生きていくことにする。そして蘭とはきっぱりわかれる。」

灰原「なんで？それはあなた…つまり工藤新一を捨てるってことなのよ？」

見回りの先生（工藤新一？）

コナン「わかつてるよ。でも今から戻っても存在しなかった時間が長かったし今頃戻れねーよ。それにさ、解毒剤作るっていう時のお前なんかくらいぜ？」

見回りの先生（解毒剤って？）

灰原「そうね、あなたが近くに居てくれないと、確かに辛いわ。」

コナン「ちえ、それだけかよ。」

灰原「それと。」

コナン「それと？」

灰原「ありがとう！」

そう言つて灰原はコナンに抱きついた。意外な展開に見回りの先生はやっと自分の義務を思い出した。

見回りの先生「何をやってるの！」

灰原とコナン「あつ。」

見回りの先生「夜中に何してるかと思つたら？保護者に連絡しますからね。」

コナン「やばいぞ。」

見回りの先生「もしもし？あつとはい、コナン君の代理の保護者でいらっしやいますか？昨日の晩にお宅のコナン君が布団を抜け出して灰原さんと抱き合っていたんですが。」

蘭「えっ？」

見回りの先生「よく注意深くしてくださいね。後それと、灰原さんがコナン君のことを工藤新一と呼んでいたんですがこころあたりありますか。」

蘭「いいえ。」

見回りの先生「変ですね、コナン君が灰原さんに俺これからもこの体で生きていくことにする。って言ったら灰原さんはなんで？それはあなた…つまり工藤新一を捨てるってことなのよ？って言ってたんですが、まあおそらく遊びでしょうね。ではくれぐれも注意しておいてくださいよ。」

蘭「はい、わかりました。」

プーぷー、電話が終わっても蘭はぼーっと立っていた。

（コナン君が新一…）

コナン「まったくいきなり抱きつくなよな、見たか？先生の顔、気まずかったぜ。」

灰原「保護者に連絡つてのまずいんじゃないかしら？怒られるでしょうねあなた、蘭さんに。」

コナン「そうだった。灰原はいいよな？怒られなさそうだし。」

灰原「ふふ」

コナン「なんだよ。」

灰原「別に。」

コナン「なんだって。」

灰原「おやすみ。」

コナン「チェ、おやすみ。」

灰原は嬉しかった、彼が蘭とわかれると言ったため、コナンが好き

な女としてやはり蘭への嫉妬の心はあった。
灰原「おやすみ。」
もう一度言った。しかし彼は寝ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4675ba/>

江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

2012年1月14日21時48分発行